

<p>物各普 精肅統 地體上</p>	<p>物各普 精肅統 地體上</p>	<p>沒各普 天體上 精肅統</p>	<p>沒各普 天體上 精肅統</p>	<p>精肅統 合時掌中珠 幾軌輔掖肅</p>
<p>物各普 精肅統 地相中</p>	<p>物各普 精肅統 地相中</p>	<p>沒各普 天相中 精肅統</p>	<p>沒各普 天相中 精肅統</p>	<p>精天 天相中 精肅統</p>
<p>物各普 精肅統 地用下</p>	<p>物各普 精肅統 地用下</p>	<p>沒各普 天變下 精肅統</p>	<p>沒各普 天變下 精肅統</p>	<p>精天 天變下 精肅統</p>

<p>星女 日月 金烏 玉兔 桂枝 星宿</p>	<p>星女 日月 金烏 玉兔 桂枝 星宿</p>	<p>九霄 一清 虛空</p>	<p>天乾 皇天 昊天 上天</p>	<p>天乾 皇天 昊天 上天</p>	<p>精肅統 人體上 人相中 人事下</p>
--	--	-------------------------	--------------------------------	--------------------------------	------------------------------------

繼時繼繼	非金非非	自辰辰辰	醜辰辰辰	龜月月月	力月月月	紫紫紫紫	後青青青	龍金星	鶻鶻鶻	皆皆皆
後絲香玉	龍胡龍龍	物物物物	陰陰陰陰	比比比比	龍龍龍龍	羅羅羅羅	鶻鶻鶻鶻	木木木木	西西西	迎迎迎
勝煙後餘	龍黑龍龍	物物物物	風風風風	騰騰騰騰	賊賊賊賊	計計計計	鶻鶻鶻鶻	水水水水	龍龍龍龍	迎迎迎
擺鶴鳳女	龍青龍龍	物物物物	和和和和	龜龜龜龜	擊擊擊擊	大太陽	鶻鶻鶻鶻	火火火火	龍龍龍龍	迎迎迎
幾峯幾幾	龍紅龍龍	物物物物	清清清清	幾幾幾幾	幾幾幾幾	大陰	鶻鶻鶻鶻	龍龍龍龍	龍龍龍龍	迎迎迎

雜 纂

番漢合時掌中珠

附圖版五

ニコライ・ネフスキ
石濱純太郎

難解なる西夏文字の釋讀に對して一つの鍵と期待せられたものは Alision Kozlov が將來した番漢合時掌中珠であつた。さうして早くも之を世に紹介し且つはその語彙を編纂して語學的研究を加へたのはイヴノフ教授だつたんだが、惜むらくは只本書第十七葉の一紙のみを附録としてあつた丈で凡て西夏文字を略して出さ無かつたから、言語の研究にはラウフェルの卓論を生むに至つても、文字の研究には餘り役立ち様も無かつた。固り當時

數葉の寫眞が東洋方面へも送られてはゐたが、學者は却つて法華經の對照等他の方法に注意を向けざるを得なかつた。その内に羅氏では送られてゐた寫眞を先づ出版されたので本書の面目の一斑は世に現はるゝ事となつた。然しイヴノフ先生の論文では明記は無いが完本らしいに關らず、新刊の同書は第七葉と第九葉から第十七葉に至る九枚併せて十葉丈なので全書の約四分の一にしか當らない。佛典の比較では發音の如何を知る事が出來難

いが、本書は發音附なのであるから矢張り全部の出版が尙更に期待された。恰もよし、イヴノフ博士は北京大使館へ轉任され然も筐中に本書の寫眞を携帶せられたと云ふので、羅君美君は請ふて之を手寫し「絕域方言集第一種」として刊行された。

同書には骨勒の序の番漢兩文共に存するし末題迄も見るを得るんだが、尙ほ中間の第三・四・五・六・八葉と第二十六葉の右半枚とが缺けてゐるから完璧とは云へない。所が茲に瓜哇なる Dr. E. Zach が露都アカデミイより送られたる寫眞中に丁度その佚葉を有してゐられて、之を我々に提示せらるゝの好情を辱くした。我々の驚喜は知る可きだ。茲に之を掲載してザツハ博士の誠意を廣く世に傳へて更に感謝の意を表する。

送られたる佚葉は五紙第三・四・五・六・八葉で、然も第三葉は前題を有し卷首となるから、これだ殆んど完璧と云つてよい。即ち板心の丁数は序文

からの通算であり、第七葉に出てゐる三十七面とは序文を含む全紙數なる事を確知し得た。又イヴノフ教授の語彙とも合する様になつた。尙ほ熟視すると紙の破損の處も（本書は蝴蝶裝だつたらう）第六・七・八葉の三枚は同じ場所であるから、此の五葉は共に同じ一本のもので異本から來たもので無い事も推定出来る。要するにイヴノフ先生が使用された完具の一本の状態が分つたのだ。

然るに同じ一本となると不審の點が目につく。第五枚の右半葉と第八葉の右半葉とが殆んど言葉が重複してゐるのが第一で、第五葉に二十八宿を列記しつゝあるが第六葉はそれを承けないのが第二、第七葉が變に途切れて殊に左半葉には十句あつて別に「此掌中珠者三十七面内更新添十句」との附記があるのが第三、第七葉から第八葉へも連接せぬのが第四、板心の體裁が種々の形になつてゐるのが第五、外欄二線の輪廓にも異同があるのが

第六、なごど頗る不審を打つべきものがある。結局これは今我等が完璧たるに幾しと喜んでゐる本は乾祐二十一年の原刻本でなく後の補刻本なので第五六・七葉のあたりに誤刻か不足か何か有つたものだから補刻して更に新に十句を添えるとかしたものだらう。それが爲め又一方却つて無理な點が生じたんでは無いか。此外にも補刻も有つたかも知れないが、今見得るものは影鈔本だから分らない。羅氏の影鈔本にも誤寫かと思はるゝ處もあるから是非次の機會には全部の影印原本の出版を期待したい。

因に第四葉板心の西夏字は「四」の字だから丁數を示したものの、第八葉の右端の背書は「時掌中珠……」と書名を書いてあるに過ぎない。

- (1) A. Ivanov : Zur Kenntnis der Hsi-hsia-Sprache
(mit 1 Tafel), Bulletin de l'Académie Impériale
des Sciences de St.-Petersbourg, VI série, Tome
III P. 1221—33, 1909.

- (二) Berthold Laufer : The Si-hia Language, a study
in Indo-chinese Philology, Tsung pao, vol. XVII,
No. 1, 1916.
(三) 羅氏兄弟のみならず、我等も此の研究に就いては羽
田博士に深甚の感謝を表せねばならない。
(四) 同書の跋には偶々第四葉の無い事を書き落してゐる